

普段着姿の認識論と存在論に立ち戻る

河 村 賢*

はじめに

2014年に出版された短いエッセイの中で、ロレイン・ダストンは、エスノメソドロジストのマイケル・リンチとスティーブ・ウールガーが1990年に出版した『科学実践における表象』という論文集のことを、大きな共感とともに振り返っている（Daston 2014）。ダストンの回想によれば、ひと昔前の科学史研究者は、科学者が書いた言葉を分析対象として特権視し過ぎており、資料のなかに図表やイラストレーションが登場するようなことがあると、そのページを飛ばして読み進めるような有様だったという。こうした状況は、現在では様変わりしている。図表、イラストレーション、写真、デジタル画像といったさまざまな視覚的表象が科学においてどう用いられているのかというトピックは、現在の科学史やSTSにおいては主要な研究関心の一つになっている¹⁾。科学アトラスという代表的な種や研究対象を集めた図像集の分析を通して科学実践を形作る概念の変容に迫った科学史の重要著作『客観性』の共著者ダストンは、科学表象の分析をそれ自体としての課題として据えたリンチとウールガーたちを、自らの先駆者として位置付けているのである。

しかし、ダストンが自らの研究をリンチとウールガーたちの試みの延長上に位置付けようとするのは、単に彼らが科学実践において用いられる視覚的表象の分析を行っていたからというだけにとどまらない。重要なのは、リンチとウールガーたちが科学表象を分析することによって何を達成しようとしていたのかという水準である。ダストンは、リンチとウールガーは「自分たちが何と戦っているのかをわかっていた」からこそ、読者に対して「さまざまな表象同士が織りなす系列の関係や方向づけの関係」を「ある仕事の過程において作り上げられた技術的なもの同士の関係」という観点から考えるように勧めたのだということを、彼らの言葉を引用

*かわむら けん 大阪経済大学 講師

する形で明記している (Daston 2014: 319)。リンチたちによるこの持って回った言い方には、そもそも表象をいかなるものとして捉えるべきかという立場そのものが、科学論において重要な争点だという含意が込められていたように思われる。ここでは、1980年代から1990年代にかけて隣接する科学史・哲学・社会学と手を取り合いながら探究が進んでいた科学論の文脈を振り返りつつ、人々が抱えている認識論と存在論を明らかにするという課題と、概念の変容を歴史的に記述するという課題の関係を再検討することで、ダストンとギャリソンの『客観性』という著作が持つ可能性を浮かび上がらせたい²⁾。

1. 認識論から認識誌へ

科学実践において用いられる視覚的表象が、リンチとウールガーにとって——科学者たちが書いた論文やそこで展開されるアーギュメントにとっての添え物などではなく——それ自体として分析に値する重要な対象として浮上したのはいかにしてだったのか。『科学実践における表象』の冒頭を飾る論文のなかで、リンチたちはトマス・クーン以来の科学論のなかで、なぜある理論が受け入れられるに至ったのか、なぜある理論が変化したのかといった問題に対して、いわゆる「社会学的」な説明が果たす役割が増えていったことに注意を促している。リンチとウールガーの想定する「社会学的説明」とは、科学において何が事実であり何が科学的手続きであるのかを決めるにあたって、科学を実践する人々の間の合意が重要な役割を果たすことを認めるタイプの説明のことである (Lynch & Woolgar [1988] 1990: 3)。こうした社会学的な説明への志向をもっとも強力に推し進めたのは、デイヴィッド・ブルアラエディンバラ学派のストロング・プログラムである。ストロング・プログラムは、正しいものであれ間違っただけのものであれ、当時人々が科学的知識であるとみなしていた内容は、そうした信念を抱く人々が行った論争、そうした論争の帰趨を決めた人々の党派性、科学的発見のクレジットを誰に帰するかという交渉、といった過程の産物として説明されなければならないと考えた (Bloor 1976)。

リンチとウールガー、そして『科学実践における表象』に寄稿した多くの論者たちは、まさにこのように一方に知識内容を、他方にそれを説明する社会的過程を置くという二分法を、批判していた。たとえばラトゥールとウールガーの『ラボラトリー・ライフ』が描きだしたように、科学者たちが実験室において観察し、測定し、書きとめ、それについてお互いに議論を交わし合うのは、しばしばそう信じられているのとは異なり、単に自然のなかに存在するモノや、自然の秩序をそのまま映し出した記号などではない。それらはすでにして、やりとりがなされる文化的過程と特定の書式のなかに埋め込まれた描出 (inscription) なのである (Latour and Woolgar [1979] 1986=2022)。この意味において、科学実践において用いられている表象——いわゆる視覚的表象だけでなく図像、特定の仕方での配置されたサンプル、言葉でなされた議論や

説明といったものを含む——は、すべてそのような表象が用いられることによって組み立てられた社会的実践と行為のなかにあるはずだ（Lynch and Woolgar [1988] 1990: 5）。リンチとウールガーが科学実践において用いられる表象の分析へと踏み出す背景にあるのは、このような方法論的な思索なのである。

したがって、科学実践において用いられる視覚的表象に対するリンチとウールガーらの関心は、あくまでも現実に実験室において営まれている科学実践への関心から生じていることに注意しなくてはならない。リンチは1993年に出版された『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』のなかで、この点をワイトゲンシュタインの「言葉はもともと特定の用法のなかから出てくる」という議論を援用する形で敷衍している。ここでリンチは、実験室のなかの社会的実践において発された言葉や書き留められたスケッチといったものは、そうした実践と切り離さずに分析しなくてはならないことに注意を向けている。なぜならばそうしない限り、すなわち不用意に「記号論の図式、歴史的系譜や意味論的ネットワークの安定した表象、社会歴史的でエスノグラフィ的な語り、認知マップなどの下に（再）収集され、位置付けられ」てしまった場合には、そうした様々な表象は「それ自身を生み出した様々な行いから切り離される」ことになってしまうからである（Lynch 1993: 270=2012: 312）³⁾。

だがリンチにとって、科学者が実験室で用いる図表や写真や言葉は、自然の中に存在するモノを写し取っただけの記号などではないと認めることは、決して科学的知識に関する反実在論の立場を取ることと同じではない。確かに科学実践において用いられている表象が観察や実験の結果必然的に生み出されるものであるということを否定する点において、そのような表象は人々のやりとりのなかで構築されたものだとする立場に向かってリンチは一步を踏み出している。しかし、そうした表象とそれが描出する事実が恣意的であり、それらを作り出す科学者の政治的動機などによって歪められているという主張から距離を取りながら、リンチは自らの研究プログラムを提示していく。

その際にリンチが強調するのは、科学的知識とは何か、それを生み出すとされる観察や仮説検証はいかなる手続きであるべきか、といったことについての理想化された説明と、実際に科学者が実験室のなかで行っていることの間には大きな距離があることが明らかになったとしても、そのことによって認識論的な議論の全てが誤りとなるわけではないということである。理想化された説明と単純な「社会学的」説明の双方から距離を取りながら、リンチは「観察」や「表象」や「事実」といった概念が実際にはどのようにして用いられているのかをめぐるさらなる経験的探究の方向性を、「観察」の概念を例にして以下のように論じている。

（……）そのような〔記述的な〕探究は、観察という用語の日常的な使用がある実践に対して固有な妥当性があるのはどのようにしてかを例証しようとするだろう。観察とは、観

察としてローカルにみなされているもの以外の何ものでもない」と強調することは、実際の実践についてアイロニカルな視点を含意するわけではない。観察とはこの他に何であろうか？むしろ、この探究は、観察という語で意味されていることを再特定化するのである（Lynch 1993: 283=2012: 325、ただし議論と接続するため [] 内を補うなどの変更を加えた）。

このように認識論的なトピックを構成する様々な概念が、実際の科学者のやりとりにおいてどのように用いられているのかを探究するプロジェクトの総体を指して、リンチは「認識トピックの再特定化」と名付けるのである。さらに後年になってリンチは、このように「表象」「事実」「客観性」といった認識論の主要なトピックを構成する概念が人々の実践においてどのように用いられているかを分析する経験的研究の潮流を、科学史家ピーター・ディアの用語を引用しながら認識誌（epistemography）と呼び直している（Lynch 2019）。ディアのもともとの用語法によれば、認識誌が扱うのは「何が科学的知識として見なされるのか？そうした知識がつくられ確認されるのはいかにしてか？それらの知識はどのように用いられ評価されるのか？」といった問いである（Dear 2005: 130）。認識論が「知識はいかにして作られうるのか、また作られるべきなのか」という規範的な問いに取り組むのとは対照的に、認識誌は科学的知識とは何かについての経験的な理解を深める探究だとされる。

このように認識論がすでに問うてきた問いを、そうした問いが実際に問われている人々の実践のなかに差し戻して議論するという認識誌の試みを、リンチはさらに哲学者ピーター・ウィンチが『社会科学の理念』で展開した議論を引き合いに出す形で説明している（Lynch 2019: 152）。ウィンチによれば、人間の行為を探究する社会科学の営みは、そうした探究に先だって日常生活のなかで理解可能なものとなっている言語に依存しているものであり、そうした日常言語の用法を解明するという形でしか行うことができない（Winch [1957] 2007=1977）。認識誌の探究は、人々が実際に認識論的な概念を用いるやりとりについて、そうしたやりとりから切り離された別の用語や要因をあてがうことで説明するのではなく、それ自体を解明の対象とするのである。

こうした議論を踏まえたくうえで、リンチが認識誌の研究の代表例として挙げる研究には、狭義のエスノメソドロジー研究や実験室研究のみならず、科学論の幅広い研究が含まれることになる。かつて自らが行った『科学実践における表象』のプロジェクトは、表象という概念を科学者たちがどのように用いているのかを記述する研究として、また真空ポンプという実験機器が生み出した事実に基づいて科学論争に決着をつけるという技法の出現を扱ったステーブン・シェイピンとサイモン・シャッファーの『リヴァイアサンと空気ポンプ』（Shapin and Schaffer [1985] 2011=2015）は、事実という認識論的な概念が人々にどのように用いられてきたのかをめぐる研究として、それぞれ位置付けられることになる。そして客観性という概念に関

する認識誌的研究として挙げられるのが、他でもなくダストンとギャリソンの『客観性』なのである（Lynch 2019: 153）。

2. 普段着姿の客観性

ディアの認識誌やリンチの認識トピックの再特定化というプロジェクトが持っていたような、現に行われている科学実践を記述的かつ経験的に捉えようとする志向は、まさに『客観性』において展開された議論からも見て取ることができる。ダストンとギャリソンは、あらゆる視座の偏りから切り離された「どこにでもないところからの眺め」としての客観性などそもそも不可能なのではないか、あるいは客観性という人間的な価値や感情を無視する悪しき認識論的規範こそが現代社会を蝕んでいるのではないか、というしばしば客観性に関して問われる二つの問いが、それぞれ別の仕方において——前者はそれを不可能な理想として後者はあまりに強固に打ち立てられてしまった規範として——客観性を時間を越えた一枚岩の概念として前提してしまっていることを指摘する。ダストンとギャリソンがそうした抽象的な概念化と対比させるのは、人々の実践のなかにおいて客観性という概念がどのように用いられているのかを分析するという自らのアプローチである。

だがもし、概念を行為で、意味を実践で置き換えるならば、客観性というぼんやりとした観念についての焦点はくっきりしたものとなる。科学的客観性は、身振り、技法、習慣、そして訓練と毎日の繰り返しを通して染み込んだ体質へと分解されていき、それは図像に、ラボのノートの走り書きに、論理的な覚え書きにあらわれている。つまりキトーンを着た大理石像のなかではなく、普段着姿の客観性である（Daston & Galison 2007: 52=2022: 42、ただし議論の接続のため訳者による補足は省略した）。

図像や走り書きが書き込まれるなかで、そうした書き込みを導くために客観性の概念が実際にどのように用いられているのかを分析する、という普段着姿の客観性を捉えようとするこの試みにおいて、図像や走り書きはやはり単純に自然のありようを映し出すだけの表象として扱われているのではない。本性への忠誠、機械化された客観性、訓練された判断、という本書で扱われる三つの主要な認識的な徳に対応するアトラスの図像は、「完成された、抜き取られた、なめらかにされた自然」であって、それらの図像は「モノの代替物ではあるが、すでにそれらのモノについての知識と混じり合っている」のだとされる（Daston & Galison 2007: 53=2022: 43）。こうしたダストンとギャリソンの記述のなかに、科学において用いられる表象を「ある仕事の過程において作り上げられた技術的なもの」として捉えるべきだというリンチとウールガーの

議論の残響を聞き取ることは十分に可能だろう。それぞれの図像が表すのは、異なる認識的徳が導く異なるテクニックによって書き込まれた、知識とすでに混じり合った自然なのである。

『客観性』のクライマックスの一つは、19世紀に雪崩のように生じた本性への忠誠から機械化された客観性へという認識的徳の転換についての議論だろう。本性への忠誠という徳が支配する時期の科学においては、アトラスに掲載される代表的な研究対象についての図像はそうした対象の本質を直観的に選び抜き理想化したものであることが期待された。これに対して機械化された客観性のもとでは、図像の作成において科学者はそのような介入を行うべきではなく、対象の不完全さも含めてあるがままを描くべきだとされた。

このような認識的徳の転換についてのダストンとギャリソンの歴史記述を注意深く追っていくならば、普段着姿の客観性を捉えるという試みを、リンチのように専ら認識誌の範疇にのみ位置付けるのは不十分なように見えてくるかもしれない。ダストンとギャリソンの試みは、アトラスの図像という自然についての表象を人々が作りあげる過程を捉えているだけではなく、そのようにして種を代表する標本や図像とは何かを確定することによって、人々が探究の対象を整えあげているという契機にも着目しているからだ。たとえばダストンとギャリソンは、アトラスにある種についての図像を掲載することは、それをまさに探究の対象である自然を代表する「ワーキング・オブジェクト」として扱うことなのだ論じている (Daston & Galison 2007: 19=2022: 16f)。このように科学的表象を作り上げ、同時に世界のなかに存在する対象を整えるという実践において、認識的徳は人々の振る舞いを導くある種の道徳や倫理として作動している。ダストンとギャリソンの議論には、科学実践で行われている表象と対象を作り上げる過程と、それを導く道徳や倫理の絡み合いを分析する構えが、すでにあると言ってよい。

科学的表象を作り上げ、科学的知識を獲得するということが、そうした表象や知識の対象となるような事実やデータを作り出し、それらに介入する契機を含んでいることに注目するという構えは、リンチ自身の議論にも見出せる。リンチは人々による認識論的な概念の用法を記述する認識誌と同じように、人々による存在論的な概念の用法を記述する存在誌 (ontography) という試みが可能だと論じている (Lynch 2013)。存在誌は認識誌と同じように、あるローカルな状況において人々が用いる存在論的なカテゴリーが、どのように用いられているのかを記述する。存在誌の可能なトピックとしてリンチが挙げるのは「証拠の算出と使用、事実は何かをめぐる論争、データ・事実・指標の普及」である。もちろん事実が認識誌のトピックであるとされていたことからわかるように、こうした概念は存在論的であると同様に認識論的でもあり、存在誌と認識誌は相互に交差する形でしか進められないだろう (Lynch 2019: 154)。

リンチはさらにこのような人々の認識論と存在論についての探究は、どちらも倫理的な考察を含むものになるだろうと述べている。このように存在誌・認識誌・倫理誌 (ethigraphy) が絡み合った研究の具体的な方向性として、リンチはかつて自らが行った神経科学の実験室にお

けるエスノグラフィー研究を挙げている（Lynch 1985）。電子顕微鏡を用いて脳細胞の損傷の回復過程を研究していたその実験室では、電子顕微鏡に写り込んだ図像のうち、何が実際に神経細胞において生じた自然現象で、何が単なる機器や人の介入によって生じてしまったアーティファクトなのかを区別するということが、科学者自身にとっての関心事となっていた。リンチが明らかにしたのは、同じアーティファクトであっても、単なる電子的なノイズとして処理されるものもあれば、研究中の細胞内組織との混同を招きデータとしての利用可能性を破壊してしまうものとして特別に警戒されるものもあるということである。さらに相対的には無害なアーティファクトですら、実験室のデータ処理の能力に関する評判を落としかねないという懸念から、公開の場で発表する画像からは取り除かれることがしばしばだったという（Lynch 2019: 157）。

このようなリンチの実験室研究は、自然物と人工物という存在論的な区別が実験室のなかでどのようにして行われているのか、またそのような区別が実験室が対外的な発表を行う際に研究者が従わなくてはならない規範や道徳とどのような関係を持っているのかを明らかにするものである。科学アトラスという表象が作られる際に科学者たちがどのような認識的徳に服していたのか、またそれによってある科学分野にとっての代表的な対象を選び出すことがどのようにして行われていたのかを論じたダストンとギャリソンの『客観性』も——実験室研究と科学史研究という見かけ上のスタイルの差異を越えて——このような人々の認識論と存在論、さらにはそれらを形作る徳や倫理との相互関係を論じた研究の系譜のなかに位置付けることができる。

3. 歴史的な存在論における知識・存在・道徳

ところで、人々が新しく作り出す知識、その知識の対象のあり方、そして人々の振る舞いを形作る道徳の関係について、多重人格や遁走といった人間に関するカテゴリーを題材として歴史的な分析を試みてきた論者として、さらに哲学者のイアン・ハッキングの名前を挙げることができる。ハッキングはミシェル・フーコーの系譜学的探究、すなわちある特定の社会状況に生まれ落ちた人々が、いかにして自らを道徳的行為者に作り上げていくのかという問いを引き継ぎながら、児童虐待や多重人格や遁走といった、19世紀から20世紀にかけての人間科学が作り出し探究の対象としたさまざまなカテゴリーが、そうしたカテゴリーを取り巻く人々の振る舞いを変えてきた歴史的な過程を論じた（Hacking 2002: 4=2012: 8）。人間についての新しいカテゴリーが登場し、それについての知識が利用可能になり、それに伴って虐待者や精神病患者への介入が正当化され、そうしたカテゴリーに該当する人々の道徳的責任が再配分されていく歴史的な過程を、ハッキングはフーコー（Foucault 1984=2006）から借りてきた「歴史

的存在論」という名のもとで描きだそうと試みる。

ある時期までのハッキングは、人間の振る舞いについての科学、すなわち人間科学の対象となる変化しやすい種は、自然科学の対象である自然種とは明確に異なる「人間種 (human kind)」に分類できると考えていた。たとえばハッキングは90年代に書かれたある論文のなかで「人間種とは、なんらかの別の目的を達成するためではなくそれ自体としての道徳的価値を持っているがゆえに、人々がなりたいたいと思ったり、なりたくないと思ったりするような種のことである」と論じている (Hacking 1995: 367)。虐待者、多重人格者、異性愛者や同性愛者といった人間についてのカテゴリーが持つこのような特徴ゆえに、そうしたカテゴリーの登場は、カテゴリーに該当する人々の振る舞いを变化させる。

こうした変化の存在について、ハッキングはもともと「事物と人間」というより日常的な区別を引き合いに出して議論を展開していた。ラクダ、山、細菌のような事物の振る舞いは、私たちがそれをどのような言語を用いて名指し、どのようなカテゴリーのもとに分類するかということそれ自体によっては影響を受けない (Hacking 2002: 108=2012: 226)。他方で子供への暴力が児童虐待として名指され社会問題化していくことは、そのような虐待者として新たに名指される人々自身の道徳的な自己理解を変えるだろうし、また問題のある親に対して周囲の人々が介入する選択肢を増やしていこう。その結果として虐待者の振る舞い自体も変化することになるのである。

細菌が細菌として名指されることそのものによっては影響を受けないというハッキングの議論に対しては、メアリー・ダグラスが早くから批判を加えている。ダグラスは、細菌がそう名指され対処法が確立されることは、しばしばそのような対処法に対する耐性を備えた菌を新たに生み出すことがあることを指摘している (Douglas 1986)。これに対するハッキングの応答は、細菌が新しくそのような耐性を獲得するということは、人間からの働きかけを意識した上で行っているわけではないのであり、人間が新しいカテゴリーや言葉そのものを意識して振る舞うこととは区別されるというものだった (Hacking 1999: 106=2006: 244)。ハッキングの応答は、人間と菌それぞれの振る舞いを直接制約するものの違いに照準したものと理解できるだろう。ハッキングはもともとの議論の文脈においてすでに「細菌が持つ可能性の範囲を定めているのは自然であって、言葉ではない」と述べている (Hacking 2002=2012: 226)⁴⁾。このように人間についての新しい言葉、カテゴリー、分類が作りだされることで、それらを取り巻く人々が道徳的行為者として振る舞いを变化させ、さらにそうした人々の振る舞いについての知識が変化するという過程のことを、ハッキングは「ループ効果 (looping effect)」と名指したうえで——そうした過程を説明するための用語法自体は度々修正しながらも——歴史的な存在論の探究の対象としていた (Hacking 1995; Hacking 1999=2006; Hacking 2007)。ここにはリンチ、ダストン、ギャリソンと同じように、知識、存在、道徳の絡み合いが新しい人間のあり方を生み出すとい

うことへの問題関心が存在したと言えるだろう。

リンチの側もハッキングの歴史的存在論の試みに対して早くから関心を寄せていたことは、『何が社会的に構成されるのか』（1999）と『マッド・トラベラーズ』（1998）の二冊の著作に関して彼が論じた書評論文（Lynch 2001）からも窺える。ここでリンチが評価したのは、ハッキングが『何が社会的に構成されるのか』のなかで再定式化したループ効果の議論である。この著書でハッキングは、自然種と人間種の区別に代えて、無反応種と相互作用種というループ効果についての議論をあらかじめ組み込んだ独自の区別を用いて議論を進めている。すなわち相互作用種とはループ効果を通して「分類された人がそのように分類されたことに対して反応することによって」変化する種類として定式化される（Hacking 1999: 119=2006: 263）⁵⁾。これに対して、分類されたことに反応することのないクォークや細菌といった事物には無反応種という名前が改めて与えられる。

このように用語法を整理したうえで、この世界に存在するいくつかの種類は相互作用すると同時に無反応でもあることにハッキングは注意を向ける。ここで事例として挙げられるのは小児自閉症の例である。いまだ厳密には特定されてはいないもののなんらかの——必ずしも単一である必要はない——神経学的な病因が小児自閉症をもたらしているということは、現在の医学研究において専門家の判断の一致がある。こうした状況において、この神経学的な病因は無反応であり、知識が利用可能になること自体には影響を受けないかもしれないが、にもかかわらず小児自閉症というカテゴリーが作られ、治療法が確立されていき、診断を受けた子供たち自身がそうした変化をわずかながらでも理解することによって、小児自閉症という病のあり方は変化する（Hacking 1999: 119=2006: 264）。自閉症において、神経学的要因の探究の進展と、それに伴って人々にもたらされる新しい病の経験のされ方を論じたハッキングの議論は、専門家が作り出した無反応種が非専門家である人々の経験やアイデンティティに組み込まれていく過程における、さまざまな種のあいだの複雑な絡み合いを見通してくれるものだと、リンチは論じたのである（Lynch 2001: 245）⁶⁾。

しかしここから18年後に展開された認識誌や存在誌をめぐるリンチの議論において、ハッキングの歴史的存在論がそうした根本的な問題関心を共有する試みとして言及されることはなかった⁷⁾。このようなすれ違いが生じた背景には、この書評論文の後半でリンチが提起した批判に端を発してハッキングとの間で交わされた、歴史記述の方法をめぐる論争の存在があると思われる。だがこの論争から時間を隔てた私たちには、リンチとハッキングの見かけ上の対立に惑わされずにこの論争において問われていたものは何なのかを考えることが可能はずだ。そのような論争の読み直しを通して、ハッキングの歴史的存在論とリンチの認識誌・存在誌の双方を、人々が現に行っている実践のなかで知識を作り出し、そうした知識に基づいて世界のあり方を変えていく過程を分析するプロジェクトとして、等しく位置付け直す可能性を

探りたい。

4. 可能性の空間を描く

リンチは同じ書評の後半において、ハッキングが『何が社会的に構成されるのか』で定式化したループ効果の議論に改めて注目している。繰り返しになるが、ループ効果とは「多重人格」や「遁走」のような人間についての新しいカテゴリーが登場することでそれについての知識の蓄積や制度化が進み、そうしたカテゴリーに該当する人々についての新しい介入が人々の新たなる反応を呼び起こし、その結果としてそうしたカテゴリーについての知識が再度書き換わるという過程を指していた。ここでリンチは、ループという言葉が、精神病院や修道院の入居者が施設に順応していく過程についてのアーヴィング・ゴフマンの分析 (Goffman 1961=1984) においてすでに用いられていたことを指摘する。カテゴリーと人々の間に生じる現象について一般的な説明を与えたハッキングの試みと、具体的な制度における人々のインタラクションを分析したゴフマンの試みをあくまでも対比的に整理しながら、リンチは次のように述べている。

ゴフマンが論じているにもかかわらず、ハッキングが自らの歴史記述では捉え損ねているのは、インタラクションは歴史的に変化する専門のカテゴリーと個人の生の間のみにおいて生じることではないということである。利用可能な専門のカテゴリーは何かということは歴史的・文化的背景としては極めて重要だが、それはそうしたカテゴリーを付与される個人の「経歴」において偶然性が占める唯一の場所ではない。ゴフマンにとって「ラベリング」の瞬間は、個人とその家族や同僚たちなどの組織において行われる、連続し緊密に織り上げられたインタラクションの連鎖の中から生じる。ゴフマンにおいてもっとも特徴的な問いは「カテゴリーとその対象は歴史的にどのように変化するのか」ではなく、むしろ「カテゴリーが人生の異なるタイミングや異なる仕方である個人にとって最初に重要なものになるのはどのようにしてなのか」という問いなのである (Lynch 2001: 249)。

このようなリンチの批判は、次のような区別に基づいて行われていることに注意しなくてはならない。つまり、カテゴリーが歴史的に変容する過程に関する問いと、カテゴリーを用いて人々が織りなすインタラクションに関する問いの区別である。つまりここでリンチは、専門的なカテゴリーとそうしたカテゴリーに該当する人々の間の相互作用に照準するハッキングの歴史記述には、ゴフマンのような人々の具体的なやりとりの分析が欠けていると論じているのである。これに対してハッキングは、リンチへの応答論文のなかでさしあたりこの区別そのもの

を否定はせずに、カテゴリーの歴史の変容とカテゴリーを用いて人々が行うインタラクションの双方を分析することが必要だという返答を与えている。たとえばハッキングは、狂気のようなカテゴリーとそれを取り巻く知識や制度のあり方が歴史的に変容する過程を分析した哲学者ミシェル・フーコーの仕事、精神病院や監獄で行われる具体的なやりとりを分析した社会学者としてのゴフマンの仕事に対置しながら、次のように反論している。

だがゴフマンに欠けているのは、様々な制度はいかにして現にあるようなものになったのか、そしてどのような思考と言明の配置が、そうした思考と言明を自然であり、人々が作り出したというよりもむしろ発見された秩序の一部であると我々がみなすことと関連しているのか、といった問いである。ある特定の場所と時間において人が担うことのできる可能な役割の集合を作り出すのは何なのだろうか？もちろん遺伝から教育までのすべてがこの問いの答えになるだろう。だが、ある社会ある時代において、人がどのような役割を担うことができるのかという空間そのものは、限らない広がりを持つ（役割は無数に多くありうる）と同時に——サルトルの言葉を使うならば——「ある種絶対的で、思考不可能で、解読不可能な無」に囲まれることで境界づけられているのである（Hacking 2004: 299f）。

ここでハッキングがサルトルを引用しながら述べている「ある特定の場所と時間において人が担うことのできる可能な役割の集合を作り出すのは何か」という問いは、概念の変化についての問いと人々のインタラクションについての問いというリンチの区別に対してどのような関係を持つのだろうか。ハッキングによるサルトルへの言及は、すでに何度か言及した「人々を作り上げる」という論文において始まっている。もともと1983年にスタンフォード大学で開催されたコロキウムで発表されたこの論文でハッキングが問うたのは、性的倒錯、多重人格、同性愛、異性愛といった、人間についてのカテゴリーが新しく登場することによって何が起こるのかという問題である。ハッキングの論点は、そのようなカテゴリーの登場とともに、新しい人間のあり方もまた登場するということである。例えばハッキングは、後に『記憶を書きかえる』としてまとめられる自らの研究に言及しながら、臨床的現象としての多重人格が作り上げられ、実際に記録された症例が急増していくのは、19世紀後半のある時点を境にしてであると論じている。カテゴリーの登場とともに新しい人間のあり方が登場することは「人間の意図的行為はある記述のもとでの行為である」というエリザベス・アンスコムに由来する議論からの帰結なのだ（ハッキングは論じている（Hacking 2002: 108=2012: 225）⁸⁾）。私たちがあつる行為を意図的に選び取ることができるためには、そうした行為について記述し想像することが可能になっていなくてはならない。それゆえに人間についての新しいカテゴリーが登場することは、多重人格者や同性愛者や異性愛者として振る舞う可能性を生み出す。ハッキングが捉

えようとするのは、このような「『ある人物であること』の可能性の空間自体が変容する」歴史的な過程なのである (Hacking 2002: 107=2012: 223)。

ハッキングはこうした可能性の空間の変化を、しばしば変化前からはまったく想像もできなかったような行為可能性が生まれることによって生じる断絶として印象的に描きだす。ハッキングは、サルトル (Sartre 1943=1956) が論じるパリのカフェのギャルソンの振る舞いを引用しながら「ある人物になることを可能にするあらゆる仕方と同じく、カフェのギャルソンになることは、ある特定の時間、場所、社会的環境においてのみ可能なのである。奥方のテーブルに料理を並べる封建時代の農奴は、領主になることはできないし、カフェのギャルソンになることもできない。しかしこれら二つの不可能性は、明らかに種類が異なるものだ」(Hacking 2002: 109=2012: 228) と述べる。ハッキングがこの二つの不可能性を区別するのは、ギャルソンの概念を持たない封建時代の農奴には、パリのギャルソンになることを想像することもできないからだ。農奴とギャルソンの可能性の空間は、それぞれ「ある種絶対的で、思考不可能で、解説不可能な無」によって境界づけられ、隔てられている。

だがこのようなハッキングの議論を、時代を隔てた歴史的なカテゴリーの変化において生じる切断を描くためだけに作り出された(不)可能性についての哲学的な類型論として捉える必要はない。実際ハッキングは、リンチへの応答のなかで、教皇の特使を殺害することでアルビジョア十字軍のきっかけを作ったトゥールーズ伯爵レイモン六世と、唯名論の哲学者にして当時異端の神学者でもあったドゥンス・スコトゥスの二人を挙げながら、両者の可能性の空間は、二人が同じ封建時代を生きていたにもかかわらず、やはりサルトル的な無によって隔てられていたと論じている。特にレイモン六世が教皇との対立を深めていく以前の段階では、スコトゥスがその後半生において関わり続けた大学、ドミニコ派、異端審問といったものは、彼の視野に入ることもしなかったはずだとしている (Hacking 2004: 301)。ハッキングにおいて可能性の空間は、ある時代を生きる一人の個人の経歴においても変化しうるものなのである。

こうした議論を踏まえるならば「ある特定の場所と時間において人が担うことのできる可能な役割の集合を作り出すのは何か」というハッキングの問いは、むしろリンチの言うようなカテゴリーの歴史的变化に関する問いと、カテゴリーを用いて人々が織りなすやりとりに関する問いの区別を無効化するための問いとして理解できるだろう。新しいカテゴリーの登場や、そのカテゴリーにどのような記述が結びつけられるかという点についての歴史的な変化は、確かに新しい行為の可能性を作り出す。しかし、それだけが可能性の空間を変化させるものの全てではない。実際ハッキングは人々に対してカテゴリーの付与が行われるのは決して「社会的真空状態」においてではないことを強調していた (Hacking 2002: 111=2012: 230)。人々が同性愛者というカテゴリーを引き受けるようになるまでの過程では、単に医学や法律やジャーナリズムが与える一方的なカテゴリーの付与が行われたわけではなく、当事者たちが結成したクラブや

団体における生活や活動が重要な意味を持っていたことをハッキングは論じている⁹⁾。こうした日常生活における人々のやりとりや振る舞いのなかでこそ、ある個人が同性愛者というカテゴリーを自らにとって重要なものにしていく過程も生じるはずだ。このように考えるのであれば、カテゴリーの歴史的な変化だけが「カテゴリーを付与される個人の「経歴」において偶然性が占める唯一の場所ではない」というリンチの指摘そのものは、むしろハッキングの議論に本来的に含まれていた立場を再論したものとして読むことができる¹⁰⁾。

5. ゴフマンのなかにフーコーを読む

ハッキングの可能性の空間をめぐる問いを、カテゴリーの歴史的変化についての問いと、カテゴリーを用いたやりとりについての問いの区別を無効化するものとして理解できるのであれば、私たちはさらに前者の問いをフーコーに、後者の問いをゴフマンに割り振るといって、リンチとハッキングがひとまず共有している議論の構図そのものを疑うことができるだろう。リンチが『アサイラム』と並んで高く評価したゴフマンの「場所の狂気」という論文は、リンチが「特徴的な問い」という微妙な書き方で示唆したのとは異なり、ただ「カテゴリーが人生の異なるタイミングや異なる仕方である個人にとって最初に重要なものになるのはどのようにしてなのか」という問いだけに取り組んでいたわけではない。むしろ職場や家庭といった様々な場所で、精神疾患に苦しむ者がどのような眼差しや扱いを受けるのか、そしてそのこと自体がいかにして人を再帰的に病に苦しむ者にするのかという過程についてのゴフマンの議論を支えているのは、患者と周囲のやりとりそのものがある歴史的で社会的な環境において可能となったことへの鋭い感覚でもある。

ゴフマンはこの論文の書き出しにおいて、精神疾患が他の病いと同じように存在し、それが医療の対象として扱われるべきだという考え方はこの200年ほどの間に成立したものだということに注意を促している（Goffman [1969] 1971: 335）。患者が様々な社会的場面に登場するようになったのも、患者の権利という観点から、病院に長期間収容するのではなく、もともと暮らしていたコミュニティに復帰させることを重視する考えが広まった1960年代においてようやく生じた社会的変化なのである。このように精神疾患をめぐる考えと制度の配置が劇的に変化しつつあった状況において、精神疾患に苦しむ人が周囲から受ける扱いとそれを受けて人が織りなすインタラクションこそが、その人が患者になる過程において重要な役割を果たすことが気づかれていったのだとゴフマンは論じている。患者の処遇をめぐる状況が変化する以前においては「精神病棟こそが状況にふさわしくない振る舞いをしてしまう人にとってもっともアクセスしやすい場所」だったからであり、そうした病棟の文脈では「患者の振る舞いを、病棟生活に対する抵抗——それも患者がそこで利用できる限られた表現手段を用いてなされる抵抗

——としてではなく、動機づけられておらず、個別に生じた異常行動として理解してしまうことはあまりにも容易だった」からだ (Goffman [1969] 1971: 355)。

旧来的な精神病棟や修道院において生じる、入居者による施設の管理者への抵抗と、抵抗に遭うことでより一層強化されてしまう抑圧という一連の過程について、ゴフマンがハッキングと同じくループ効果という言葉を用いて詳細に分析していたことは、すでに見たようにリンチが指摘した通りである (Lynch 2001: 247)。そしてそのような特定の社会的環境に置かれた入居者が、その場で利用できる限られた手段を用いて行ったなげなしの抵抗についてのゴフマンの分析を、「生態学的分析」と名指すこともまったく正しいだろう。しかし「場所の狂気」でゴフマンが展開した議論を読むことで、そうした旧来の病棟内のインタラクションに照準し、そこで行われる振る舞いを単なる「異常行動」ではなく「抵抗」という記述のもとで分析するというゴフマンの生態学的分析の構えそのものが、1960年代のアメリカという特定の歴史的・社会的状況のもとではじめて可能になったことを私たちは見て取ることができる。精神疾患者というカテゴリーといかなる記述を結びつけることができるか、そうしたカテゴリーに該当する人々をどのような制度のもとで処遇すべきか、といった点についての私たちの考えが変化したことが、それ以前の病棟内の人々のインタラクションについての生態学的分析に立ち戻ることを可能にしていたのである。このように人々が営んでいる実践とそれについての分析が、ともに歴史的に生じたある環境のもとで可能になっているがゆえに、歴史についての問いとインタラクションについての問いは決して切り離すことができないのである¹¹⁾。

そうだとするならば、リンチやハッキングのようにカテゴリーの歴史的变化についての問いとカテゴリーを用いたやりとりについての問いをあえて切り離したうえで、前者の問いに取り組んだフォーコーと、後者の問いに取り組んだゴフマンを、互いに相補的なものとして読む必要はもはやない。私たちはむしろ、ゴフマンのなかにフォーコーを、フォーコーのなかにゴフマンを読むことができる¹²⁾。ハッキングが人々を作り上げるというプロジェクトを振り返って定式化したように「自らをあるタイプの人としてみなすようにうながされることで、その人の感じ方は違うものとなったり、自らについて違った経験をできるようになるのだろうか？分類、ラベル、言葉やフレーズが利用可能になることは、ある可能性を開き他の可能性を閉じるのだろうか？」(Hacking 2004: 285)という可能性の空間をめぐる問いは、カテゴリー、分類、言葉、すなわち概念の歴史的变化についての問いと、そうした概念を用いることで人々が振る舞うやり方についての問いの区別を越えたところで問われている。こうした問いを立て、またそれに取り組むことで、人々がそれに基づいて様々な実践を組み立てているところの——ダストンとギャリソンの言葉になぞらえて言うならば——普段着姿の認識論と存在論に、私たちは立ち戻ることができるはずだ。

おわりに

かつて科学史と哲学と社会学にまたがる学際的な領域において、知識がそれとして獲得されるのはいかなる実践においてなのか、あるいは実践を通して作り出された科学的知識は世界のあり方をどのように変えるのかといった記述的で経験的な関心が共有されていた時代があった。そうした試みに対して認識誌という名前を与えたリンチ自身も、そこで挙げられる研究の多くが1980年代から1990年代——すなわち科学論がSTSとして制度化される以前であった時期——に行われたものであること、そして現在STSで盛んになっているのはむしろ規範的あるいは政治的な問題関心に導かれた研究であることを認めている（Lynch 2019: 153）¹³⁾。もしも学術的な議論が単線的な歴史を描いて発展するしかないのだとしたら、私たちがここまで試みてきた議論は、「西洋」で行われた議論の翻訳のために生じる時間的な遅れゆえにそうなることをあらかじめ運命付けられていた、すでに終わった潮流の目録管理の営みでしかないことになるだろう。

だが学術的な議論が単一の歴史的軌跡を描くということがあらかじめ決まっているわけではない。もし学術的な議論の展開が複数の軌跡を描きうるもののだとしたら、翻訳によって生じる時間的な遅れが常に単なる「遅れ」を意味するとは限らない。むしろ翻訳の過程を経ることは、それまで遠く離れて見えたようないくつかの議論の時間的・意味論的な距離を近づけ、思わぬような議論の配置の見通しをもたらしてくれるかもしれない¹⁴⁾。そうだとするならば『客観性』と『ラボラトリー・ライフ』がほぼ同時に翻訳されたことは、日本において英語圏とも異なる仕方で議論が進められてきたエスノメソドロジーとの対話を手がかりにしながら、そして既存の議論において生じていた不必要な対立を回避しながら、カテゴリーの歴史の記述と人々のインタラクションの分析を結びつけながら前進させる機会となりうるだろう。私たちがここでやってきたのも、そうした回路を切り開いていくための試みだったのである。

注

- 1) ダストンは科学史と美術史の交点に位置するそのような研究として、ジョナサン・クレーラーのいくつかの研究を挙げている（Crary 1990=2005; Stafford 1994; Jones and Galison 1998）。またダストンのエッセイが収められたのと同じ論文集には、ウィトゲンシュタインの視覚アスペクトの議論を承けながら、NASAの火星探査チームがデジタル画像を用いて火星の地質についての発見を「描き出す」技法を分析した論文が収録されている（Vertesi 2014）。
- 2) なおこの論考は、2022年7月24日に人文研アカデミーの一環として行われた合同合評会「実践としての科学的認識：『客観性』『ラボラトリー・ライフ』を読む」での議論を出発点として書き始められ、2023年9月1日に人文研共同研究班「モノ・知識・環境」（班長：瀬戸口明久）の

活動として行われた研究会「実践のなかの概念を捉える：リンチ・ハッキング・ダストン & ギャリソン」にて読み上げられた草稿を、研究会での議論を受けて大幅に改稿したものである。執筆のための重要な手がかりを与えてくれた、前田泰樹さんと岡澤康浩さんをはじめとする二つの研究会の参加者たちに感謝したい。

- 3) ここでリンチは、実験室研究となんらかの言葉や表象の歴史的系譜を辿る探究を含めた多くの他の研究のアプローチを鋭く対比させているのだが、のちに私たちは「可能性の空間を記述する」という課題に照準することで、こうした対比を必ずしも前提する必要はなくなるということ論じていく。
- 4) ただしこのように事物と人間を対比させるハッキングが、現代の結核患者は100年前とは異なり薬剤投与によって治療されるようになったことを論じたうえで「ここで細菌や患者に起こることは(…)私の記述——それが正しいにせよ間違いであるにせよ——とはまったく関係ない」(Hacking 2002: 108=2012: 226)と断言していることには注意が必要である。ダグラスの批判は、むしろこうした断言に——あるいは現在の結核についてのこうした断言のみで議論が終わってしまうことに——向けられていたのかもしれない。彼女の批判には、人間についてであれ細菌についてであれ、何かを名指し言葉を与えるということは「より大きな封じ込めの行為」の一部をなしているのではないかという論点が含まれていたからである (Douglas 1986: 101)。人類が結核を封じ込めることを試みてきた歴史的なプロセスに目を向けるならば、結核菌と結核病患者について起こったことはそれらについての記述と無関連だった、と主張するのは難しくなる。古典的な医学史研究が教えるように、100年前のヨーロッパで主たる結核治療の場だったサナトリウムは、19世紀に登場した治療可能な病としての結核という概念によって可能となり、高地におけるある種の保養リゾートとしての流行や、著名な文学者たちによる滞在経験の作品化にも支えられて普及していった (Dubos and Dubos [1952] 1987: 176)。こうした歴史的な過程について、のちにハッキング自身が小児自閉症について論じたように、病因と結核を患う人々のあいだの複雑な絡み合いを分析することもできるだろう。ダグラスが人々を作り上げることをめぐる議論に関してもっとも初期に提起した批判では、このあとハッキングが行った用語法や立場の変更にもつながりうるハードケースの問題がすでに問われていたのである。
- 5) ハッキングが用いた相互作用種という語の原語は interactive kind である。interaction という語はさまざまな仕方で翻訳されうるが、おおむね人間同士の具体的なやりとりのことを指す場合には「相互行為」と訳し、より抽象的なファクターの間に働く作用のことを指す場合には「相互作用」と訳すという慣習が確立されているように思われる。このセクションに登場したハッキングの議論において interaction はカテゴリーや観念と人々の間に働く抽象的な関係として想定されており (Hacking 1999: 103=2006: 236f)、また既存の翻訳における訳語を踏襲することもできるため、相互作用と訳すことにする。厄介なことに、次のセクションで検討するリンチとハッキングの論争においては、まさに interaction という語が人々同士の具体的なやりとりをも指しうることを利用した議論がリンチによって提示されることになるのだが、そのように理解できる文脈では混乱を避けるために「インタラクション」という別の訳語を採用することにした。リンチとハッキングの論争は、このように interaction という語そのものの理解の仕方の違いにも淵源している。
- 6) ここでリンチが、ループ効果が典型的に起こるとされる相互作用種についての議論ではなく、むしろ無反応種が人々の経験やアイデンティティに組み込まれていく——まさに小児自閉症の事例のような——より境界的な事例についての議論を評価しているのは、その後のハッキング

の転回を踏まえると示唆的なように思われる。というのは、他から明確に区別されたものとしての人間種と相互作用種という分類が存在するという考えを、ハッキングは後に放棄するからである。彼は2007年の時点で「分類、人々、知識、専門家といったものは、ループ効果と人々が作り上げられる過程についての説明にとって欠かせないものであるが、相互作用種あるいは人間種と呼ぶに値するような明確に定義可能な人々の分類など存在しない」とはっきりと述べている（Hacking 2007: 293）。ある時期以降のハッキングは、ループ効果あるいは人々を作り上げることをめぐる自らの議論を保持しつつも、むしろ種の分類をめぐる哲学的な議論をそこから切り離していったのである。そうであるからこそ、ハッキングが後に残した議論を現在から読み返す際の有効なやりかたの一つは、彼の哲学的な議論やテーゼだけを取り出してそれらの変遷や整合性をそれ自体として検討するのではなく——とはいえこのセクションの注において私たちはある種の不可避な出発点としてそのような作業に着手せざるをえなかったのだが——むしろ事例の分析のなかに彼の哲学的な議論がどのように生かされているのかを検討していくことなのである。

- 7) ハッキングの名前自体はリンチが存在誌の議論を行うときにしばしば登場するのだが、それらはハッキングが『何が社会的に構成されるのか』で用いた、事実、真理、現実などの抽象的概念をまとめた「エレベーター語」という用語に関する言及にすぎない（Lynch 2013: 450; Lynch 2018: 159）。
- 8) 前田泰樹はアンスコムやウィンチの議論を踏まえながら、行為に記述を与えることがそのような行為を行った人々に意図、動機、知識、能力といったものを帰属させることと内的な関係があることを指摘したうえで、そうした帰属が現実の医療現場のやりとりにおいて「相談をする」ことや「助言を退ける」ことといった指し手になっていることを具体的に分析している。新しい行為の記述が利用可能になることは、単にそのように記述される行為を意図的に選択することだけでなく「その記述が状況に埋め込まれつつ理解可能なものとされていく実践」（前田 2008: 39）そのものを作り出すのだと考えることができる。
- 9) 1960年代以降に進展した同性愛者たちの権利運動と、それに対して仕掛けられた保守派からのバックラッシュ、さらに当事者たちからの反論といった一連の応酬の結果として、私たちがゲイやレズビアンといったカテゴリーにいかなる記述を結びつけるかというやり方は、それ以前から根本的な変化を被っている（Paternotte 2014）。1951年に発表された小説のなかで、ある男性が少年の頭を撫でるという行為が flitty というスラングで形容されることでいかなるカテゴリーの帰属が行われているのか（Kawamura & Okazawa 2023: 124）、1964年に行われたハーヴェイ・サックスの講義のなかで登場するある男性が、かつてヘアスタイリストであったと述べることでなぜ同性愛者である可能性が仄めかされていると理解できるのか（Sacks 1992: 47）といったことを、同性愛というカテゴリーに関する知識や語彙の歴史的变化についての注釈抜きに現在私たちが理解し分析することはできないだろう。次のセクションで精神疾患のカテゴリーに関してより詳細に議論する、カテゴリーについての歴史的变化によって生まれた分析の可能性という論点を、ここにも見出すことができる。
- 10) 一人の生の経験においてカテゴリーを付与されたり引き受けたりする過程についての視座や分析が、ハッキングの議論に実際にどの程度含まれているかという点をめぐっては議論の余地があるかもしれない。こうした観点からリンチとハッキングの論争に言及した先行研究としては、浦野（2007）と浦野（2014）を参照のこと。
- 11) エスノメソドロジストのジェフ・クルターは、会話分析を含めたエスノメソドロジー研究が行っているのは、人々が行っているやりとりの形式的な特徴を一般化可能な仕方——たとえ

- ば統計的なサンプリングと分析を用いて—— 証明することではなく、人々のやりとりを可能にしているアプリアリな論理文法を解明することなのだと論じている (Coulter 1983: 374f)。クルターがこのような議論を展開する際に引き合いに出しているのは、アイデアや命題の間の論理的関係を把握することと、人々同士の社会的関係を把握することの間にある類比性に関するウィンチの議論である。この議論のなかでウィンチは、時代を隔てた人々、たとえばギリシャの哲学者や中世の騎士の言葉遣いや振る舞いからなる社会的関係を理解するためには、単に私たちが現在の社会において慣れ親しんでいる仕方を投射するだけでは不十分だと論じていた (Winch [1958] 2007: 123-5=1979: 162-5)。クルターとウィンチの議論にまで立ち戻るならば、人々のやりとりを作り出し可能にしている概念は、時に歴史的に変化しうるものであり、そのような概念を用いて営まれている実践の文法を明らかにすることこそが、エスノメソドロロジーの探究なのだという理解が可能になる。エスノメソドロロジーについてのこうした特徴づけが正しいのだとしたら、ハッキングの歴史的な存在論やゴフマンの生態学的分析は、すでに別の名前では呼ばれたエスノメソドロロジーなのである。なお、ハッキングの人々を作り上げることについての議論や、ウィンチの論理文法分析を引き継ぎながら、人々の実践の可能性の条件の探究として「概念分析の社会学」という別名をエスノメソドロロジーに与え、実際の分析にも取り組んだ先駆的な試みとしては、酒井泰斗らによる一連の研究プロジェクトが挙げられる (酒井他 2009: 6f; 酒井他 2016: 295)。
- 12) ただしこの論考では後者の「フーコーのなかにゴフマンを読む」という試みについて実際に着手することはできなかった。今後の議論のためには、ハッキングとフーコーの歴史記述の関係について見通しを与えた石井 (2013) が出発点となるだろう。
- 13) シェイピンとシャッフアーも自らの共同研究を可能にした、かつてイギリスの科学史研究者の間に抱かれていた共通の問題関心——そこにはリンチやクルターのようなエスノメソドロジストの議論の源でもあるウイトゲンシュタインの後期哲学も含まれる——のことを『リヴァイアサンと空気ポンプ』2011年版の序文である種の郷愁を込めて振り返っている (Shapin & Schaffer [1985] 2011 xxiv=2015: 12)。
- 14) 翻訳が可能にする時間的・空間的転置が既存の読みを覆すアドバンテージになりうるというアイデアについては、岡澤康浩のトマス・クーン論を参照のこと (岡澤 2023: 43f)。

参考文献

- Bloor, David, 1976, *Knowledge and Social Imagery*, Chicago: University of Chicago Press.
- Coopmans, Catelijne, Janet Vertesi, Michael Lynch and Steve Woolgar eds., 2014, *Representation in Scientific Practice Revisited*, Cambridge: MIT Press.
- Coulter, Jeff, 1983, "Contingent and A Priori Structures in Sequential Analysis," *Human Studies*, 6 (4): 361-376.
- Crary, Jonathan, 1990, *Techniques of the Observer: On Vision and Modernity in the Nineteenth Century*, Cambridge: MIT Press. (遠藤知己訳, 2005, 『観察者の糸譜——視覚空間の変容とダニティ』以文社.)
- Daston, Lorraine, 2014, "Beyond Representation," Coopmans, Vertesi, Michael Lynch and Woolgar eds., *Representation in Scientific Practice Revisited*, 319-22.
- Daston, Lorraine and Peter Galison, 2007, *Objectivity*, New York: Zone Books. (瀬戸口明久・岡澤康浩・坂本邦暢・有賀暢迪訳, 2021, 『客観性』名古屋大学出版会.)

- Dear, Peter, 2001, "Science Studies as Epistemography," Jay A. Labinger and Harry Collins eds., *The One Culture?: A Conversation about Science*, Chicago: University of Chicago Press, 128-141.
- Douglas, Mary, 1986, *How Institutions Think*. New York: Syracuse University Press.
- Dubos, René Jules and Jean Dubos. [1957] 1987, *The White Plague: Tuberculosis, Man, and Society: With a New Foreword by David Mechanic and a New Introductory Essay by Barbara Gutmann Rosenkrantz*, New Brunswick: Rutgers University Press.
- Foucault, Michel, (Catherine Porter trans.), 1984, "What is Enlightenment?" Paul Rabinow ed., *The Foucault Reader*, New York: Pantheon, 32-50. (石田英敬訳, 2006, 「啓蒙とは何か」小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編『フーコー・コレクション6——生政治・統治』ちくま学芸文庫, 362-395.)
- Goffman, Erving, 1961, *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*. New Brunswick: AldineTransaction. (石黒毅訳, 1984, 『アサイラム——施設被収容者の日常世界』誠信書房.)
- Goffman, Erving, 1969, "The Insanity of Place," *Psychiatry*, 32(4): 357-388. Reprinted in: Goffman, Erving, 1971, *Relations in Public*, New York: Basic Books, 335-90.
- Hacking, Ian, 1986, "Making Up People," Thomas C. Heller and Christine Brooke-Rose eds., *Reconstructing Individualism: Autonomy, Individuality, and the Self in Western Thought*, Stanford: Stanford University Press, 222-36. Reprinted in: Ian Hacking, 2002, *Historical Ontology*, Cambridge: Harvard University Press, 99-114.
- Hacking, Ian, 1995, "The Looping Effects of Human Kinds," Dan Sperber, David Premack and Ann J. Premack eds., *Causal Cognition: A Multidisciplinary Debate*, Oxford: Oxford University Press, 351-94.
- Hacking, Ian, 1999, *The Social Construction of What?*, Cambridge: Harvard University Press. (出口康夫・久米暁訳, 2006, 『何が社会的に構成されるのか』岩波書店.)
- Hacking, Ian, 2002, *Historical Ontology*, Cambridge: Harvard University Press. (出口康夫・大西琢朗・渡辺一弘訳, 2012, 『知の歴史学』岩波書店.)
- Hacking, Ian, 2004, "Between Michel Foucault and Erving Goffman: Between Discourse in the Abstract and Face-to-Face Interaction." *Economy and Society*, 33(3): 277-302.
- Hacking, Ian, 2007, "Kinds of People: Moving Targets," *Proceedings of the British Academy*, 151: 285-318.
- 石井幸夫, 2013, 「種の曖昧な縁——ハッキングの歴史的な存在論について」中河伸俊・赤川学編『方法としての構築主義』勁草書房, 195-215.
- Jones, Caroline A. and Peter Galison eds., 1998, *Picturing Science, Producing Art*, New York: Routledge.
- Kawamura, Ken and Ryo Okazawa, 2023, "Reading What is Not There: Ethnomethodological Analysis of the Membership Category, Action, and Reason in Novels and Short Stories," *Human Studies*, 46(1): 117-135.
- Latour, Bruno and Steve Woolgar, [1979] 1986, *Laboratory Life: The Construction of Scientific Facts, Revised Paperback ed.*, Princeton: Princeton University Press. (立石裕二・森下翔・金信行・猪口智広・小川湧司・水上拓哉・吉田航太訳, 2022, 『ラボラトリー・ライフ——科学的事実の構築』ナカニシヤ書店.)

- Lynch, Michael, 1985, *Art and Artifacts in Laboratory Science: A Study of Shop Work and Shop Talk in a Research Laboratory*, London and New York: Routledge & Kagan Paul.
- Lynch, Michael, 1993, *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*. (水川喜文・中村和生・浦野茂・前田泰樹・高山啓子・岡田光弘・芦川晋訳, 2012, 『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』勁草書房.)
- Lynch, Michael, 2001, “The Contingencies of Social Construction,” *Economy and Society*, 30 (2): 240-254.
- Lynch, Michael, 2013, “Ontography: Investigating the Production of Things, Deflating Ontology” *Social Studies of Science*, 43(3): 444-462.
- Lynch, Michael, 2019, “Ontography as the Study of Locally Organized Ontologies,” *ZMK Zeitschrift für Medien-und Kulturforschung*, 10(1): 147-160.
- Lynch, Michael and Steve Woolgar, 1988, “Introduction: Sociological Orientations to Representational Practice in Science” *Human Studies*, 11 (2/3): 99-116. Reprinted in Michael Lynch and Steve Woolgar eds., 1990, *Representation in Scientific Practice*, Cambridge: MIT Press, 1-18.
- 前田泰樹, 2008, 『心の文法——医療実践の社会学』新曜社.
- 岡澤康浩, 2023, 「範例と二人の哲学者——推論する動物たちの生態史のために」『思想』1194: 33-47.
- Paternotte, David, 2014, “Pedophilia, Homosexuality and Gay and Lesbian Activism,” Gert Hekma and Alain Giami eds, *Sexual Revolutions* London: Palgrave Macmillan, 264-278.
- Sacks, Harvey, 1992, *Lectures on Conversation Vol. I*, London: Blackwell.
- Sartre, Jean Paul, 1943, *L'être et le néant: essai d'ontologie phénoménologique* Paris: Gallimard. (Hazel E. Barnes, trans., 1956, *Being and Nothingness: An Essay in Phenomenological Ontology*, New York: Philosophical Library.)
- Shapin, Steven and Simon Schaffer, [1985] 2011, *Leviathan and the Air-Pump: Hobbes, Boyle, and the Experimental life, with a New Introduction by the Authors*, Princeton: Princeton University Press. (吉本秀之・柴田和宏・坂本邦暢訳, 2015 『リヴァイアサンと空気ポンプ: ホッブズ, ボイル, 実験的生活』名古屋大学出版会.)
- Stafford, Barbara Maria, 1994, *Artful Science: Enlightenment Entertainment and the Eclipse of Visual Education*, Cambridge: MIT Press.
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編, 2009, 『概念分析の社会学——社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版.
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根編, 2016, 『概念分析の社会学2——実践の社会的論理』ナカニシヤ出版.
- 浦野茂, 2007, 「記憶の科学——イアン・ハッキングの「歴史的的存在論」を手がかりに」『哲學』117: 245-266.
- 浦野茂, 2014, 「保健医療分野をめぐるエスノメソドロジー——診断をめぐるいくつかの論点について」『保健医療社会学論集』25(1): 10-16.
- Vertesi, Janet, 2014, “Drawing as: Distinctions and Disambiguation in Digital Images of Mars,” Coopmans, Vertesi, Lynch and Woolgar eds., *Representation in Scientific Practice Revisited*, 14-36.
- Winch, Peter, [1958]2007, *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, Routledge Classics ed., London and New York: Routledge. (森川規雄訳, 1977, 『社会科学の理念』新曜社.)